

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between atopic dermatitis in pregnant women and preterm births: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

アトピー性皮膚炎合併妊娠と早産の関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Maternal and Child Health Journal

年: 2024

DOI: 10.1007/s10995-024-03950-2

筆頭著者名: 磯上 弘貴

所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

アトピー性皮膚炎(以下、AD)は全身のかゆみや湿疹を伴う皮膚疾患であり、成人女性での罹患率は8%とされています。妊婦におけるAD合併率は比較的高いにもかかわらず、AD合併妊娠の早産への影響に関しての先行研究では相反する結果が報告されています。また、妊婦への子宮収縮抑制剤である塩酸リトドリン投与が与える影響についても不明です。そこで、妊婦への塩酸リトドリン投与の影響を考慮したAD合併妊娠と早産の関連について報告した大規模研究はないため、エコチル調査データを利用してその関連を調べました。

方法:

エコチル調査に参加した妊婦及び生まれた子どものデータから、22週以降に分娩となった症例を対象とし、妊娠第1期時点でのADの有無と妊娠37週、34週、28週以前の早産との関連について統計学的な解析を行いました。解析時に、妊婦の基礎データ(年齢、体格、分娩回数、分娩週数など)、妊婦の社会的な背景因子(喫煙、飲酒、学歴、収入など)、出産経過要因(妊婦への塩酸リトドリン投与の有無)なども考慮しました。

結果:

83,796人の妊婦について解析を行いました。ADを合併していない妊婦と比較して、ADを合併している妊婦では、妊娠37週以前の早産が統計的に減少することが示唆されました(調整オッズ比0.89)。一方、妊娠34週以前、28週以前の早産との間には関連がありませんでした。この結果は、妊婦が塩酸リトドリンを投与された場合を除外しても一貫していました。

考察(研究の限界を含める):

AD合併妊娠における早産発症率の低下は、その病態に起因すると考えられます。妊婦では妊娠中の胎児の拒絶反応を防ぐために免疫寛容という機序が作用しており、ADにおいては、妊娠中は細胞性免疫から液性免疫へ免疫応答が移行する特徴があります。この妊娠・AD双方の免疫学的変化が妊娠を維持するために作用し、妊娠期間の延長につながる可能性が考えられます。本研究の限界は、AD罹患の有無が自己評価による回答であること、ADの重症度を加味していないこと、さらには早産の危険因子に関する情報が欠如していること、人工早産(母胎治療上必要な早産)と自然早産を区別していない、ということがあります。

結論:

AD合併妊娠と妊娠37週以前の早産率の低下は、母体への塩酸リトドリン投与の影響を除外しても関連がみられました。